

これから先

青木康征

設立されて五十年といえば短かくない時間であるが、その五分の四にあたる年月を一会员として過ごした小生にはなんと短かかったことか。学会設立に尽力された先輩会员諸氏がここはおのれの城とばかり学会室に陣取つておられた姿が昨日のように思い出される。学会の仕事は、発足当时も、小生が入会したころも、そして現在も基本的に変わりがない。会员（学生と教員）から預る年会費を基に、会员の知的研鑽に資する活動を大学本体とは距離をおいたかたちで展開し支援することにある。

設立されて五十年ということは、学会が目的とする活動を企画し、実行し、一年を終え、新たな一年を迎える、このサイクルが五〇回繰り返されたということである。それがどうしたというのだ、それで、これからどうしようというのだ・・・。これまでの歩みをふりかえる格好の機会を得たいま、われわれとして心新たに為すべきは〈これから先〉を切りひらいてゆくことだろう。年輪とともにこわばつてゆく樹皮を突き破つて新芽がぞくぞくと出て伸びやかに成長してゆく、そのような明日へ向かって進むことだろう。そのためには研鑽を

続けるしかない。そうした明日への確かな道は、原点に戻ることになるが、われらが学会誌〈人文研究〉をたくましく隆盛させることである。会員各位の奮闘を！